

表題その後徒然なるままに書き留めたい日常生活面で、身近に感じたこと、目にしたことなどを
だらだら拙文で、ここに続編として記します。

＝神様は人種差別をした？＝

自然的なもので日本にあってもドイツにないものと言ったらナンだ。さて何でしょう。

思いつくまま記してみると、①に気象現象、②に地形立地が大きく違う点が挙げられよう。

①の気象では、台風、にわか雨があっても長雨がなく、②の地形では地震がなく、山や川が少ない。

このため、豪雨による土砂災害、河川の増水氾濫、堤防決壊の浸水、竜巻、地震災害、津波、火山噴火災害、山の遭難などなど、生活上でこれらに対する遭遇、避難警戒情報や実際の避難勧告が背中に皆無で、日々何も身に迫ることなくニュース零で暮らせるとは、この享受がドイツと日本の人々に及ぶことの是非、この世で居住環境がこうも違っていいものか、これは明白な日本人とドイツ人への人種差別ではないか。

神様は、天地を分け隔てなく同じもので与えてくれなかったものである。

なお、ドイツにおける二大河川ドナウ川とライン川は、アルプス山脈が水源地となって、それぞれ黒海、北海へと流れ注いでおり、昔から河川交通の要衝として生活に寄与する重要な川で、ライン川上流では、1860年頃より洪水軽減と内陸舟運のための河川整備が行われ、1930年頃には水力発電と内陸水運の整備も行われたとの記録がある。

＝居住形態、入室の仕組み＝

フランクフルトの市街地における居住形は、建物を一体にして内部を複数に区切り、それぞれを独立した住居にして供与するアパート形式の集合住宅が多い。

その造りは、東西南北の道路を挟む敷地に口の字で囲むヨーロッパに良く見られる中庭方式（ミニ公園や子供の遊具施設を配した遊び場が多い）が一般的である。

大概を5～6階建て（地下は駐車場）にして高さが軒並みそろい、持ち家、賃貸様々で、最近日本の大都市に多い住居主体の高層えんぴつビルの林立は見当たらない、何処へ行っても統一された景観を醸し出している。

日本でマンション（アパートが転じた和製英語名）に頻繁に登場する「〇〇ハイツ」のハイツは、英語で高台にある家、「〇〇ハイム」のハイムは、ドイツ語で単に家という意味で、当地集合住宅の建物には名称はなく、その地域名が街路板に標されている。

郵便物は、都市名と地域街路板に後述の建物仕切り付番を記して届き、サインが必要な物は、部屋番がないので、フロアーをインターホン越しに伝えて、戸別の玄関で受け取る。

各住居への出入りは、歩道に面して建物一体が、ブロック別に上層へ縦割り（ブロック1フロア3住戸が多い）として仕切り別に番号が付してあり、歩道からダイレクトに1階キー差しの扉開錠で入るとそのまま自動で閉まり、内有的階段かエレベーター（EV）利用（あたりは暗いのでEV前の照明ボタンを押して点灯後は自動消灯）。

各フロア戸別玄関のキー差しで扉開錠し部屋へ入る。ホテルと同じ仕組みで、扉を開けて玄関ホール無しの即廊下で下足するつくり。

中庭からも同様でブロック別に入ることができて、特にドイツの主婦は、勤めなど外出で留守する

家庭が多く、登下校の学童を含めて、当然のことながらキー持参が必携で、誰かが在宅ありでは戸別のインターホンで確認（日本の室番コール操作と違い、ドイツは戸別にネーム直結）し合って入室する。

なお、各家庭の光熱のことに触れると、部屋の明かりは各室とも調光式で全開でも暗いため、必要最小限のスポットライトを多用し、台所のコンロ、食器洗い機、洗濯機類（シーツ類は乾燥機で、その他は窓際やバルコニーで可動式の物干ラックで）はオール電化で、給湯、シャワー、暖房設備（放熱式が多い）は地下室からの電力温熱源で、ガスや石油利用は一切ない。

水道は山や川が少ないため地下水から供給され、光熱一つを見てもエネルギー省力化の精神がうかがえる。

＝外食・日常の食事、献立＝

先ず外食で大きな違いは、日本食店では、店が違ふとメニューが絞られるが、ドイツ食店は、どの店でもメニューが変わらないのが一般的である。

この違いは、日本食店は、和食（丼もの、ご飯にオカズ付料理、麺類）、洋食（西洋・中華料理、麺類）と店により献立が多彩で限定料理食もあるのに対して、ドイツ食店は、パンにソーセージやハム、シュニッツェル（鶏肉、七面鳥、豚肉、牛肉など肉類いづれかをうす切りの揚げカツ風）、ポテト、チーズの盛り合わせ、野菜主体で取り込んだ単純料理食が当たり前のメニューである。

日本は食べたい店を選んで、メニューによってはオーダーすると小皿に数品が並び、一方ドイツは豊富に点在する店内やテラスエリアへ気ままに、大概何処の店でも同種一辺倒の定番メニューを大皿一つに小皿一つくらいでオーダーすると、半端じゃないお皿一杯の量の多さを男も女もペロッと平らげるのが日常外食の在り様である。

中にはテイクアウトする人もあり、よくも飽きないものと感心する。

一方お祭り市を覗くと、日本のお祭りといえば、年間行事時で神社境内の限られた一角やそこへ続く道路の片側脇に縦列に並びテント張りの出店が一般的である。

メニューは焼きそば、ケチャップ添えフランクソーセージ、モロコシ、たこ焼き類で酒・ビールなしが定番で見られるが、ドイツでは、年末のクリスマス市、適時のポロ市や美術館市などで、旧市街地の広場、広大な歩道敷き、遊覧川散歩道と自転車道（photo 1）外の片隅空地の一角にテント可動の出店がにぎやかに並び、

店ではドイツ食定番（通常一般メニューと同様）が用意され、勿論ワイン・ビール OK で、簡易テーブル席か歩きながらの手持ち立食で、ここではコップ、皿は返却すると戻入され、日暮れ時には一斉に店が閉まり、人は立ち去ってにぎやかさが一変し、あたり一帯は静かにその日が終わる。

また、主要な駅の構内（photo 2）に並び店頭には、ハム、ソーセージ、キングサーモン、ニシンなどにチーズ、刻み玉ネギ、トマト、レタスなどがこぼれるように挟んだサンドイッチに飲み物が用意され、朝、昼、夕時といわず買って列車に乗り込む人、勤め先の人、家に持ち帰る人などなど多く見かける光景である。

＝飲料水、ワイン、ビール、アイスクリーム＝

飲料水のことに触れると、水道水は石灰質の硬水（日本は軟水）で、各家庭は、生水が飲めないの、普通の水と炭酸入りの水をボトルでまとめ買いし、ストックしておくのが一般的である。

それにジュース類やワイン好きの国（マーケットでの買い物バケツにはたいてい入っている）で、

食卓には赤ワイン、白ワイン、リンゴワイン、ビールが並ぶ。

外食時の注文も料理にワインやビール（小麦を多くの割合で使用して醸造した白ビールが多い）付で老若男女が欠かすことなくよく飲み、ここで水をうっかり注文すると有料で、日本で黙っていても水が必ず運ばれるのとは大違いである。

また、街を歩いていると、よくアイスクリームの店を見かけるが、どこの店頭でも色とりどりで種類が多いのにびっくり。

子供から大人まで立ち止まって覗き、好みのアイスクリームを買い、コーヒー付きで買った人は店内や外のテラス席が利用可で、大概の人は歩きながら口にして、子供はともかく大人連中も堂々たるもので、これはよく見られる光景で、拙者も時々買って（2ユーロ）口にしたがとても美味しかった。

＝生活用品ペーパー類の比較（日本N、ドイツD）＝

生活上でよく使用するペーパー類は、トイレトペーパー①、ティッシュ②、キッチンタオル③、携帯用ティッシュ④などが挙げられようが、この中で特に①のサイズ、紙質を比較すると、Nにはシングル、ダブルあるのに対して、Dはシングルのみで、長手幅はNよりDが約1.5cm狭く、紙厚はNよりDが厚めで、ミシン目状切り取りはND変わらない、②のサイズはND変わらない。

紙厚はNよりDが厚いため1枚取り出しで充分が、紙厚が薄いNは2～3枚取り出し?となり、③の幅厚はNよりDが大きめでソフト、④はNよりDの袋が厚めで細長にできていて、①②③④の大小比較、使い勝手はどちらに軍配が挙がるのか、それぞれの単品価格はNDそれほど大差はない。

＝屋外ローラースケートパーク、噴水広場＝

メイン川脇の一角には、ローラースケート、スケボー、キックボード、モトクロスなど好きなものを気軽に持ち寄って自由に滑れる、屋外施設「ローラースケートパーク (photo K)」なる遊び場の設備があり、場内ではお互いが、衝突に気を配りあって滑りを楽しむ子供から学童、若者たちでにぎわっており、中には場内難所をすいすいの技を競い合う上級業師も交じっていて、立ち寄って見入る外野席の人達と共に目を奪われた。

また、ドイツの街角には、ミニ広場が点在し、少し広めの場所には噴水の仕掛け (photo L) がしてあるところもあり、ここでは、タイマーセットの水の吹上りの中に飛び入って楽しむ幼児から学童たち、周りを取り囲んで涼の一時を過ごす老若男女を目にするのも一つの光景である。

＝学童期学校の警備＝

滞在先の近くに学童期に通う学校があり、眼に止まった大きなことは、開校日は、校舎を囲む仕切りフェンスの校門口、校舎口、教室が何人も常時出入り自由で、警備要員はおろか防備一切なしの在り様にはびっくり。

学校周りの日中は、誰彼となく人影はまばらながら、近くにはマーケットやトラム停があり、往来は絶えない立地がそうしているのか。学校は聖域とする国家なのか。

日本では、かの事件以来、学校の囲いが一層厳重に防備され、登下校時は校門での警備が強化され、関係者以外は一斉シャットアウトの出入り禁止処置が通達されたが、元来ドイツの治安は、ヨーロッパEU圏ではナンバーワンとされるものの、同様な事件は皆無なのか、安全面の無防備さは日本とはかけ離れている。了



遊覧川岸の自転車道と散歩道、テラス席 I
(自転車道は川辺の色違い路ではっきり分る)



駅構内店頭の様子 J
(左側が折返し発着ホーム)



ローラースケートパークの様子 K
・周りの交錯に気配りし合間を素早く滑る
(不注意事故の害は双方が自己責任を被る)
・お椀状の上級者用滑りゾーンも隣接する



街角の噴水あるミニ広場で過ごす人達 L
・子供たちの噴水内での水を浴びとベビーカー
・通りの両側はアパートが並び高さが揃っている
(かすか最奥右手に見えるのはオフィスビル)